

# 英雄たちのポエニ戦争

## カルタゴとローマ

東地中海では古くから海洋民族が活発に活動していた。彼らの船は竜骨を持ち波の衝撃に強く、外洋の航海に適していた。彼らは帆と櫂を用いて航海し、その往来は沿岸各地を結び付けて東地中海世界が形成されていった。そのような海洋民族の1つにフェニキア人がいた。フェニキア人は西地中海にまで進出し、沿岸各地に植民市を建てた。その中で大きな力を持ったのが、北アフリカに本拠地を持つカルタゴ<sup>1</sup>であった。カルタゴは海洋交易国家として発展し、シチリアやサルディニアにも拠点を持つ地中海の覇者へと成長した。

ローマははじめ都市国家として成立し、前 500 年頃に共和政に移行した。ローマは侵攻を繰り返す異民族を退け、逆に攻撃を仕掛けて領土を拡大していった。一時ガリア人によって蹂躪されたこともあったものの、困難な戦いとなったサムニウム戦争も乗り越えて、前 272 年タレントゥムを陥落させ遂にイタリア半島の覇者となった。

ローマの急速な成長に、地中海西部を勢力圏としてきたカルタゴは警戒心を募らせることとなった。両者は度々条約を締結・改定し、エペイロス王ピュロスの侵攻の際にはこれを迎撃するために協力した。しかしベネヴェントゥムの戦いでピュロスが敗北し、更にローマがタレントゥムを支配下に収めると、ローマとカルタゴは互いを強い警戒の目で見ることになっていったのである。

## 戦争の発端

戦争の発端となったのはシチリアにおける騒乱であった。当時シチリアのギリシア人植民市メッサナは、マメルティニ<sup>2</sup>の掌中にあった。彼らは元々シュラクサイの僭主アガトクレスに雇われたカンパニア出身の傭兵団であったが、アガトクレスの死で行き場を失いメッサナを占領して定住していた。これに対し、前 275 年頃にシュラクサイの僭主となったヒエロン 2 世は追討軍を差し向け、前 270 年マメルティニをロンガノス川の戦いで破ってメッサナの町を包囲した。町は苦境に陥り、マメルティニも分裂してある者はカルタゴに、ある者はローマに救援を求めた。カルタゴはすぐに行動を起こし、軍を派遣してメッサナの城塞を占拠した。

ローマにとって援軍派遣はカルタゴに宣戦布告をするのと同じ事であった<sup>3</sup>。元老院はカルタゴの力の強大さを熟知していたため援軍派遣に慎重な姿勢をとった。また、ローマは以前レギオンを占拠した守備隊を厳罰に処しており、同様の行為を行っているマメルティ

---

1 フェニキア語ではカルト・ハダシュト。

2 オスク語で軍神マルスの息子たちの意。

3 ローマのシチリアへの介入を禁止する条約がローマ・カルタゴ間にあったといわれる。

ニを援助するのは不合理だというのも援軍派遣を躊躇させた。

しかしその一方で、カルタゴが全シチリアを手中に収めるというのはローマにとって非常に危険なことであり、ローマはこの機にメッサナを確保したいと考えた。そのためこの議題は執政官により民会にかけられた。戦勝がもたらしうる利益を唱える主戦論者が世論を動かし、メッセナ援助の法案が決定した。マメルティニの援助は、ローマが全イタリア人に表明した保護の一環という形で正当化された。そして前 264 年、執政官アッピウス・クラウディウス・カウデクスが司令官としてメッサナに派遣され<sup>4</sup>、第 1 次ポエニ戦争が勃発した。

## シチリアの動向

ローマ軍前衛部隊がシチリアに向かったときには、カルタゴは既にヒエロン 2 世とマメルティニの和平を仲介し、メッサナに軍を駐留させていた。マメルティニたちはローマ側にもう援助は必要ないと伝えた。しかし指揮官ガイウス・クラウディウスは軍を進め、策謀と脅しでカルタゴ軍にメッサナを明け渡させた。これに対しカルタゴ軍は艦隊を派遣し、ヒエロン 2 世と協力して陸海両方からメッサナを包囲した。

カルタゴは戦争の拡大を回避するためローマに使者を派遣し、最後の話し合いを試みた。カルタゴ側は海上覇権で以て脅しをかけたがローマは応じず、両者の対立は最早後戻りできないものとなった。

カルタゴ側に包囲されたローマ軍だったが、その攻囲をどうにかやり過ごし<sup>5</sup>、更にシュラクサイを包囲することまで成功した。翌前 263 年、ローマは 2 人の執政官を軍団と共にシチリアに派遣した。ローマ軍はカルタゴ・シュラクサイ連合軍を破り、これを見たシチリアの都市の大半はカルタゴとシュラクサイから離反した。この功績で執政官の 1 人マニウス・ウァレリウス・マクシムスは「メッサラ」<sup>6</sup>の渾名を得た。

情勢の不利を悟ったヒエロン 2 世もカルタゴとの同盟を放棄し、和睦として賠償金を支払ってローマと同盟を結んだ。これによりローマ軍はシチリアでの兵站を確保し、一方のカルタゴはシチリア救護の大義名分を失うことになった。

ローマとシュラクサイの同盟に対抗するため、カルタゴは軍勢を集めてシチリアへ派遣し、アクラガスを拠点とした。翌前 262 年、ローマは全軍を投入してアクラガスを包囲した。これに対しカルタゴは指揮官ハンノ率いる軍をシチリアに送り、町を攻囲するローマ軍を包囲した。カルタゴ軍に挟まれたローマ軍は物資の欠乏と疫病に苦しんだが、ヒエロン 2 世からの補給もあって何とか持ちこたえた。

---

<sup>4</sup> この時点ではローマは甲板のある船を持たなかったため、南イタリアの諸都市から船を借りた。

<sup>5</sup> この経緯はよくわかっていない。

<sup>6</sup> 「メッサナの英雄」の意。

二重の包囲戦は7ヶ月に及んだが、結局市内のカルタゴ軍の食糧が先に尽きた。狼煙でこれを知ったハンノはローマ軍に攻撃を仕掛けた。戦いは長時間続いたが、最後はカルタゴ軍が敗走して決着を見た。しかしローマ軍が疲労と勝利への陶醉から包囲を弱めたので、市内のカルタゴ軍は夜の内に脱出した。これに気付いたローマ軍は敵のなくなった町を略奪し、全住民を奴隷にした。

## 捕虜になった執政官

シチリアの陸戦で勝利を収めたローマは、カルタゴの海上覇権への挑戦に乗り出した。カルタゴの影響で開戦後ローマと同盟市の商業は麻痺しており、制海はローマにとって重大な問題となっていた。しかしローマはそれまで半島内で勢力を拡大してきたため、海戦の経験がほとんどなかった。一方のカルタゴは船団を自由に操る海の覇者である。海上の戦いはローマの圧倒的不利に見えた。しかしここで幸運がローマに味方した。ローマ軍がシチリアに渡るのを妨害しようとしたカルタゴの軍船が座礁し、ローマはこれを拿捕したのである。この船を模倣して、100隻の五段櫂船と20隻の三段櫂船が造られた。こうして前262年、ローマ史上初の艦隊が建設されたのである。

また、ローマ軍は陸戦には強い自信を持っていた。そこでローマ軍は「カラス」という兵器を考案した。これは先端に鉤のついた橋桁を帆柱から吊るして立てたもので、敵船に近づく綱を緩めて船の間に「橋」を架けるものであった。「カラス」を用いて兵力を敵船に送り込むことで、戦いを「海上の陸戦」に持ち込むことができると考えたのである。

建設された艦隊の司令官には、執政官グナエウス・コルネリウス・スキピオが就任した。前260年、スキピオは兵站部を設置するため17隻の先発隊を率いてメッサナに向かった。

メッサナでスキピオは、シチリア北岸沖の島リパラ（現リパリ）の守備隊が手薄で、うまく働きかければローマに寝返る可能性があるという情報を得た。そこでスキピオはリパラに向かった。確かにリパラの守備隊は手薄であった。しかしちょうどその頃、シチリア北岸の町パノルムス（現パレルモ）には約150隻のカルタゴ主力艦隊が駐屯していた。

カルタゴの艦隊司令官ギスコの子ハンニバルは、スキピオの動向を見て20隻をリパラに向かわせた。20隻は夜間にリパラに到着し、ローマ軍が気付いた時には港はカルタゴ軍に封鎖されていた。ローマ兵たちはパニックに陥って抵抗することもできず、スキピオを含む大半の兵士が戦わずして捕虜となった。スキピオは数年の内に解放されたが、以降彼は「アシナ」<sup>7</sup>と呼ばれることになった。

スキピオを捕虜にした後、ハンニバルは残りのローマ軍の所在を確かめるために130隻を率いて海岸沿いを進んだ。そしてミュラエ沖でローマ艦隊に遭遇し戦闘に入った。

このときローマ軍を指揮したのはもう1人の執政官ガイウス・ドゥイリウスであった。

---

<sup>7</sup> 「ロバ」を意味するアシヌスの女性形。

彼は「カラス」を考案したとされる人物である。彼の思惑通り、「カラス」を用いた戦闘は大きな効果を上げた。ドゥイリウスはカルタゴ軍を圧倒し、カルタゴ側は少なくとも 50 隻を喪失、ハンニバルの乗っていた七段櫓船も拿捕された。ハンニバル自身はボートでどうにか船上から離脱した。カルタゴ軍が海戦でこのように圧倒されるのはかつてないことであった。

## 北アフリカへ

ミュラエの海戦の後、ローマはカルタゴを地中海の島々を奪取していく作戦をとることにした。前 259 年ローマはコルシカを占領したが、サルディニア奪取はうまくいかず、作戦は結果を出せなかった。そこで元老院は方針を変更し、カルタゴ本土攻撃を決定した。

前 256 年ローマ人たちは、かつて執政官としてサベリー人を破った人物であるマルクス・アティリウス・レグルスを執政官に再選した。レグルスは同僚の執政官ルキウス・マンリウス・ウォルソ・ロンクスと共に、330 隻を率いてシュラクサイ経由で北アフリカを目指した。

カルタゴはアフリカに到達する前にローマ軍を食い止めようと艦隊を派遣した。両軍はシチリアのエクノモス岬沖で衝突した。カルタゴ軍は船速・船員数ともに勝る自軍の勝利を確信していた。しかしここでも「カラス」とローマ陸軍がその力を発揮し、戦いはローマ軍の勝利に終わった。

カルタゴ軍を破ったローマ軍は北アフリカに到着し、直ちに攻撃を行ってアスピスを占領した。カルタゴ艦隊はカルタゴ湾を防衛していたため、ローマ軍は妨害を受けずに済んだ。ローマ側は計画の順調な進行に安心し、ロンクスを艦隊の大部分と軍勢の半分と共に帰還させた。

一方レグルスは進撃を続け、迎撃に向かったカルタゴ主力部隊をアディスで破ってトゥネス（現チュニス）へと進軍した。このときヌミディア諸部族も蜂起してカルタゴ周辺に大損害を与えた。恐怖に駆られた住民たちは市内に逃げ込み、過剰な人口集中でカルタゴは飢餓に陥った。

カルタゴを追い詰めたと考えたレグルスは、不平等極まりない条件を突き付けて降伏を迫った。カルタゴ政府は最初和睦に応じるつもりであったが、条件に激怒して講和を拒絶した。カルタゴはローマ軍司令官に対抗するため、スパルタ人クサンティッポを雇い入れて司令官とした。

クサンティッポの下でカルタゴ軍は多数の騎兵部隊と象部隊を整え、翌前 255 年バグラダスの戦いでローマ軍に圧勝した。ローマ軍は象部隊によって蹂躪され、レグルスを含む逃げ遅れた兵士たち約 500 人が捕虜となった。

執政官マルクス・アエミリウス・パウルスは、264 隻を率いて逃げ延びた兵士たちを救うため北アフリカへと向かった。艦隊はアフリカに到着し、クルペアに堡壘を築いて立て

籠もっていた敗残兵たちを乗せてローマへ向かった。しかし帰還の途中、専門家の忠告を無視してパチーノ岬沖で嵐に見舞われた。184隻が嵐で難破し、犠牲者は数千人に上るというローマ海軍史上最悪の事故となった。

## ドレパヌムの惨劇

アフリカ侵攻の失敗の後、ローマは再び島々を制圧していく方針をとることにした。一方カルタゴ側は、ハンノの子ハスドゥルバルをリリュバエウム（現マルサラ）に上陸させた。戦局は次第に膠着し泥沼化していった。戦争序盤で大きな成果を上げた「カラス」の威力も薄くなっていった。未熟な操船技術ゆえに、船を重くする「カラス」は悪天候時に大きな被害と原因となった。そのためローマ軍は「カラス」の搭載を諦めた。一方のカルタゴもローマ軍侵攻とヌミディア人の反乱で疲弊し、シチリアに大軍を送ることはできないでいた。

前 254 年、スキピオ・アシーナが執政官に再選された。海難事故の後ローマは新たに 220 隻の軍船を建造し、その指揮をスキピオ・アシーナら 2 人の執政官に委ねた。スキピオ・アシーナは見事にその期待に応えた。シチリアに上陸するとパノルムスを包囲し、全ての要塞を崩して町を降伏させたのである。以降パノルムスはシチリアにおけるローマの主要基地となった。

前 253 年、ローマ軍は海岸都市の略奪のため再びアフリカへと向かった。この計画自体は成功したが帰還途中に嵐に遭い、ローマは再び 150 隻もの軍艦を失うことになった。

ローマの艦隊は崩壊してアフリカを攻撃する力はなくなっていた。一方シチリアの戦闘はローマ有利に動いた。前 252 年、シチリア北岸におけるカルタゴの最後の拠点テルマイと、リバラをローマが掌握したのである。翌年にはパノルムスでローマ軍がカルタゴ軍に圧勝し、シチリアで不利となったカルタゴは和平を申し入れた。しかしローマでは主戦派が再び主導権を握っており、和平は退けられた。

前 250 年、ローマ軍はリリュバエウムの海軍基地を包囲したが、カルタゴ軍は持ちこたえ続けローマ側に多数の死者が出た。その中で前 249 年に執政官に就任したのが、プブリウス・アッピウス・クラウディウス・プルケルだった。クラウディウスは人員不足となった艦隊を引き継ぎ、その再建にあたることになった。

クラウディウスはリリュバエウム北東に位置する町ドレパヌム（現トラパニ）を攻撃することを決めた。彼は 120 隻を率いて夜間にドレパヌムに向かった。彼は脱落船が出ないよう見張るため、自身の乗る船を最後尾につけた。

クラウディウスの計画は、明け方に港について敵に悟られる前に攻撃に移るといったものだった。戦いの前に、聖なる鶏を用いた占いが行われた。鶏が盛んに餌を食べれば神の加護があると考えられていたが、このとき鶏は全く食べようとしなかった。しかしクラウディウスは作戦を変える気などなく、この鶏を海に投げ込ませた。

一方カルタゴの艦隊司令官アドゥヘルバルは、ローマ軍接近の知らせを聞くと直ちに艦隊を出撃させた。クラウディウスは最後尾にいたためにこれに気づかなかった。ローマ軍は適切な指揮を欠いた状態となり、最後には岸を背にして身動きが取れなくなってそこにカルタゴ艦隊が港の外から攻撃を仕掛けた。戦いはカルタゴ軍の圧勝に終わり、ローマ軍は93隻を喪失した。

クラウディウスは残存の船団で敵陣を正面突破して戦場から逃げ延びた。この惨事を受けて、ローマ市民は独裁官擁立を求めた。このときクラウディウスは執政官の立場を利用し、自分の元奴隷の子クラウディウス・グリキアを独裁官にしようとした。これにローマ市民は激怒し、プブリウスを謀反の罪で告発した。その後彼の裁判は一時延期となったが、裁判が再開される前にプブリウスは死去した。

## カルタゴの反攻

ドレパヌムの戦いの後、ユニウス・プルス率いるローマ艦隊がリリュバエウム攻囲軍への補給に向かった。しかしカルタゴ軍に遭遇し、数に押される内に嵐に遭って壊滅した。ユニウスはどうか生還し、その後エリュクス山を占領した。これによりローマ軍はリリュバエウムとドレパヌムの両方を陸から攻略できるようになった。海上での度重なる惨事にローマ人は制海権を諦め、シチリアでの陸上戦に全力を投入するようになっていった。

前247年、カルタゴは若き將軍ハミルカル<sup>8</sup>・バルカをシチリアでの最高指揮官に任命した。それまでカルタゴ軍は、ローマ軍が包囲した都市に援軍を送るという消極的な方法をとっていた。しかしハミルカルはパノルムス近くのヘイルクテーという丘に陣を構えた。この丘は険しいうえに見晴らしがよく、しかも近くに天然の良港があった。ハミルカル軍は神出鬼没の活動を見せ、海軍も沿岸各地を攻撃して略奪を行った。ハミルカルは決して大きな戦いには持ち込もうとせず、縦横無尽の暗躍でローマ軍を苦しめた。以降3年にわたり、ローマ軍はほとんど打つ手がなかった。

やがてハミルカルは一気に攻勢に打って出た。シチリア西岸に大攻勢を仕掛け、更にイタリア沿岸部をも攻撃した。これにはローマの財力を消耗させ、民衆を疲弊させる目的があった。実際、ローマは大量の物資・人員をつぎ込んでハミルカルに対抗しようとしたが見るべき成果を上げることはできなかった。ハミルカルはローマ側の拠点エリュクスを奪取し、ローマ軍はこれを囲んだが駆逐することはできなかった。ローマ優位にあったシチリア戦線はハミルカルの活躍で逆転し、戦況は増々ローマの不利になっていくように思われた。

---

<sup>8</sup> フェニキア語ではアブド・メルカルト「メルカルト神の僕」だったとみられる。

## ローマの逆襲

大きく不利な状況に立たされたローマであったが、ハミルカルへの補給を絶つことで戦争にけりをつけようと再び艦隊の建造に乗り出した。膠着したまま長引いた戦争で国庫は乏しくなっていたため、艦隊は貴族たちが私費を投じて何とか完成させた。

そうして前 242 年には再び海戦に臨む態勢が整った。この年執政官に選ばれたのは、ルタティウス一族初の執政官となるガイウス・ルタティウス・カトゥルスであった。カトゥルスと共に選ばれたアルビヌスはマルス神官でローマを離れられなかったため、艦隊の指揮はカトゥルスに委ねられることになった。

カトゥルスは法務官<sup>9</sup>ウァレリウス・ファルトと共に艦隊を率いてシチリアに向かった。カルタゴ軍の海上補給路を断つため、カトゥルスは港の封鎖にとりかかった。しかし自ら戦闘に参加して脚に重傷を負ってしまった。カトゥルスの傷が治癒するまで戦闘は休止となった。カトゥルスはその間に兵士たちを徹底的に鍛え上げ、結果ローマ兵たちは敵と対等以上の戦いぶりを見せるようになった。

一方カルタゴは、海戦は既に決着したものと考えて乗組員の任を解き、軍船も退役させていた。そのためローマ艦隊復活の報せはカルタゴを驚愕させ、今度はカルタゴが艦隊の建設に全力を注がねばならない事態となった。

カルタゴは補給物資を満載した新艦隊をシチリアへと派遣した。カルタゴ側はカトゥルスに悟られずにハミルカルに補給物資を届け、熟練の海兵の一部を譲り受けた上でローマ艦隊と交戦するつもりであった。しかしカトゥルスはこれを察知し、前 241 年 3 月 10 日にリリュバエウム沖でカルタゴ艦隊に追いついた。ところがこの日は海が荒れており、カトゥルスは悪天候の中で戦うか積み荷を降ろし精鋭が加わった艦隊と戦うかという選択を迫られた。

結局カトゥルスは嵐の中で戦うことを選択した。この判断は正しかった。重い荷を積み新兵たちから成っていたカルタゴ艦隊はカトゥルスが鍛え上げた艦隊に敵わなかった。ローマ艦隊はカルタゴ船を 50 隻沈め、それ以上を捕獲した。

カルタゴの国庫は既に尽きかけており、艦隊を再建する力は最早残っていなかった。カルタゴはハミルカルに和睦を含む全権を委ねた。ハミルカルはカトゥルスの下に和平交渉の使節を派遣し、カトゥルスはこの機会を逃さなかった。カルタゴはローマが提示した講和条件を受け入れた。こうして 20 年以上続いた第 1 次ポエニ戦争は遂に集結した。カルタゴは巨額の賠償金を支払い、ローマはシチリアを獲得した。

## カルタゴの騒乱

終戦後、ハミルカルは将軍の地位を降り傭兵たちの処遇を国家に委ねた。ハミルカル

---

<sup>9</sup> プラエトル。属州統治・軍隊指揮・刑事訴訟の裁定などを担当した公職。

から傭兵団を引き継いだ司令官ギスコは、傭兵たちがカルタゴに集結して騒動の原因となるのを防ぐため、間隔を開けて帰還船をカルタゴに送った。しかしカルタゴ政府は傭兵たちを集めて一度に支払えば給与を値切れるかもしれないと考え、帰還傭兵たちを市内に留めた。戦争と賠償金支払いでカルタゴの国庫は枯渇していたのである。

その内傭兵たちの乱暴狼藉が目立つようになり、政府は傭兵たちにわずかばかりの報酬を与え、支払い準備ができるまでシッカという町で待機するよう伝えた。傭兵たちは不満を抱えたまま待機していたが、そこにハンノがやってきた。彼は国庫の乏しさを理由に給与引き下げを提案した。これに激怒した傭兵たちはシッカを出てカルタゴへ向かった。彼らはトゥネスに陣取って政府に繰り返し要求を突きつけた。ギスコはこの知らせを聞き、急いで帰国して交渉を始めた。

ギスコは民族ごとに10説得を行った上で給与の支払いにとりかかった。しかしその際、スペンディオスとマトースという2人が傭兵たちに暴動をけしかけた。スペンディオスはローマの脱走奴隷、マトースはトゥネス占拠の主導者であり、和解を恐れていた。2人は扇動演説を繰り返し、傭兵たちは2人以外が発言しようとするや即座に投石して打ち殺した。こうして反対者を排除した傭兵たちは2人を「将軍」に選んだ。

ギスコはなおも説得を続けたが、給与支払いを後回しにされていたリビア人が暴徒化しギスコを捕えた。これを機に全軍がマトースらの指揮下でカルタゴに反乱を起こした。反乱にはカルタゴによる過酷な収奪に苦しんでいたアフリカの人々少なくとも7万人が加わった。

政府はハンノを中心に市民兵と新規の傭兵で応戦しようとしたが、反乱軍に全く対抗できなかった。そこでカルタゴ政府はハミルカルを召喚、反乱鎮定の全権を委ねた。反乱軍の傭兵たちはもとはといえばハミルカル麾下にいた兵士たちであったため、反乱軍の中には彼を畏敬する者もいた。そこでハミルカルはその忠誠心に訴えかけ、正規軍に加わるよう勧めた。

ハミルカルの行動に反乱軍の兵士たちの心は揺れ始めた。反乱指導者たちは兵士たちの逃亡を恐れ、ギスコら捕虜を惨殺しそれに抗議する兵士も惨殺した。これによりハミルカルの温情に縋る望みはなくなってしまい、反乱軍の兵士たちには戦う他に選択肢がなかった。

戦いは凄惨なものとなり、両陣営が見せしめ行為を繰り返した。ハミルカルはカルタゴ市を包囲する反乱軍を突破し、逆に外側から反乱軍を包囲した。反乱軍は補給を絶たれ飢餓状態に陥った。停戦協議のため出頭したスペンディオスは処刑され、蜂起軍の主力は包囲されて殲滅された。マトースは戦いを続けたが、結局ハミルカルに敗れた。こうして前241年から4年にわたって続いた大反乱は終結した。反乱を平定したカルタゴ派蜂起に加担した町・種族に対し報復を行った。

---

10 カルタゴの傭兵団は多数の民族の混成部隊であり、話す言葉もばらばらであった。



## イベリア遠征

第一次ポエニ戦争の後、ローマはカルタゴに言いがかりをつけてサルディニア、コルシカをも併合した。これによりカルタゴは鉱物資源に富むイベリア半島への独占的航路を失うことになった。そこでハミルカルはイベリアの直接的開発に乗り出した。

前 236 年、ハミルカルは一家を率いてイベリア半島へと向かった。ケルト＝イベリア人は部族同士のまとまりがなかったため、ハミルカルは原住部族を次々に征服していった。彼は服属したケルト人たちをカルタゴ風に訓練し強力な軍隊を構築した。族長たちはハミルカルを畏れ、次々にその傘下に降っていった。

ハミルカルはイベリアを順調に征服していき、西はガデスから東はナオ岬付近まで支配領域を拡大した。彼は新たな植民市としてアクラ・レウケーを築いた。反ローマの急先鋒だったハミルカルによるこれらの行動にローマは警戒心を強めた。前 231 年頃にはローマはハミルカルの下に使節を派遣し、何故スペインにいるのかと問い詰めた。これに対しハミルカルは、ローマに払う賠償金のための行動であると皮肉でもって答えた。

ハミルカルの死は突然に訪れた。前 229 年頃、ハミルカルはヘリケーという町を攻囲したが敗北し、退却する途中に増水した川で溺死してしまったのである。当時ハミルカルの長子ハンニバル・バルカはまだ 18 歳であり、その義兄ハスドゥルバルがハミルカルの跡を継ぐことになった。

ハスドゥルバルはカルタゴ・ノウア（現カタルヘナ）を建設し、銀鉱を開発した。それとともに原住部族の信頼を勝ち取った。彼のイベリアにおける功績はカルタゴ復興に大きく貢献した。

ローマにとってカルタゴの急速な立ち直りは脅威であった。しかしこのときローマは北イタリアでのケルト人との戦いに忙殺されており、ハスドゥルバルに対し強硬な姿勢をとることができなかった。そこで前 226 年頃、ローマはハスドゥルバルの下に使節を派遣し、カルタゴは戦争を意図してイベルの川<sup>11</sup>を渡ってはならないとする条約を結んだ。

前 221 年、ハスドゥルバルは奴隷によって暗殺された。ハスドゥルバルの死が伝えられると、兵士たちはハンニバルを最高指揮官に選んだ。カルタゴの民会もこの決定を承認し、25 歳のハンニバルがイベリア半島のカルタゴ軍を率いることになった。

## カルタゴの猛将

最高指揮官となったハンニバルはすぐにイベリア征服に着手した。まず東部の諸部族を服属させ、貢納を課して多額の資金を獲得した。翌前 220 年には北部のワッカエイ族を攻撃し、その帰路トレトゥム（現トレド）近郊でカルペタニー族を中心とする大軍に奇襲されたがこれも打ち破った。

---

<sup>11</sup> イベルス川（現エブロ川）とされる。

同年末にハンニバルはカルタゴ・ノウァに戻ったが、そこにローマの使節が待ち受けていた。使節はハンニバルに、サグントゥムへの攻撃とイベルの川の渡河について警告した。サグントゥムはローマの保護下にあり、イベルの川の渡河は条約に違反しているというのがローマ側の主張だった。これに対しハンニバルは、ローマはサグントゥムに不正な介入をしており、サグントゥムの真の保護者は自分たちだと反論した。この瞬間、開戦は避けられないものとなった。

前 219 年春、ハンニバルはサグントゥムを攻撃し、8ヶ月に及ぶ攻囲戦の末に占領した。これに対しローマはカルタゴに使者を派遣し、ハンニバルを引き渡すか、さもなければ戦争だと最後通牒を突きつけた。だが既に国力を回復し、更にハンニバルからサグントゥムでの戦利品を受け取っていたカルタゴはこれを拒否した。その場で両国は互いに宣戦布告を行い、第2次ポエニ戦争が勃発した。

ハンニバルはイベリアとアフリカの防備を固め、更に北イタリア・アルプスのケルト人と協力関係を結んだ。そして本国から宣戦布告の報せが届くと進軍を始め、瞬く間にスペイン北東部を征服し、イベルス川を越えてピレネー山脈の麓に至った。ここでハンニバルは、新たに征服した民族を監視するため軍の一部を留めおき、また兵士たちに配慮してイベリア人兵士の一部を帰郷させた。

一方のローマは、執政官プブリウス・コルネリウス・スキピオをイベリアに、ティベリウス・センプロニウス・ロンクスをアフリカに派遣することを決めた。スキピオは当初ハンニバルがイベリアにいる内に迎撃するつもりであった。ところが、北イタリアでケルト人が蜂起したためスキピオの出発が遅れた。ハンニバルのケルト人との同盟策が功を奏したのであった。

ハンニバルは前 218 年の夏にピレネー山脈を越えた。そしてローヌ川に到達すると北上し、即席の筏を用いて川を渡った。このときローマ・カルタゴ両軍の斥候隊同士が遭遇して戦いとなった。これがハンニバル軍とローマ軍の最初の戦いとなった。

渡河を終えたハンニバルはアロブログス族の土地に入った。そこには丁度北イタリアのポイイ族の使節が来ており、ハンニバルに北イタリアの情勢だけでなくアルプス越えの進路の情報をももたらした。更にハンニバルは内紛の裁定を行ったことでアロブログス族の協力を得、食糧の補給を確保することに成功した。

ハンニバルは東へ進み、アルプス山脈へと至った。一方スキピオはハンニバルのローヌ渡河の3日後にローヌ川に着き、カルタゴ軍が既にイタリアへ向かったと知って呆然とした。そこでスキピオは弟のグナエウスにイベリア攻略を任せ、自身はイタリアへと引き返した。

## アルプス越え

ハンニバルは愈々アルプスを登り始めた。アロブログス族の一派や敵対的な部族が攻撃

を仕掛けてきたがハンニバルはこれを退け、ほどなく敵の襲撃は殆ど止んだ。しかし間もなく冬になろうかという時期の山越えは厳しさを極め、多数の脱落者が出た。下りは更に困難なものとなった。雪で凍てついた道は険しく、崖崩れで道が狭くなった場所では人も馬も象も足を滑らせて谷底に消えていった。ハンニバルは道を開削して崖を通り抜け、何とかイタリアの平野に到達した。

ハンニバルは多大な犠牲を払いながらもアルプス越えを成し遂げた。ハンニバルはイタリアへと侵攻し、スキピオがティキヌス川（現ティチーノ川）でこれを迎え撃った。ローマ軍はカルタゴ軍の騎兵隊に圧倒されて敗北し、スキピオ自身も負傷してトレビア川まで退却した。川を挟んで対峙した両軍の兵力はほぼ互角であった。スキピオは負傷のために現場で指揮が取れないのもあって攻撃には慎重な姿勢をとった。

やがてシチリアから呼び戻されたロングスが2個軍団を率いて到着した。戦いは氷雨と雪の降り注ぐ冬至の日起こった。カルタゴのヌミディア騎兵が川を渡ってくると、ロングスはスキピオの忠告を無視して応戦し、あっけなく退却したヌミディア騎兵隊に対して追撃を行った。しかしそれはハンニバルの罠だった。ローマ軍が川を渡り終えると、そこには防寒を万全にして準備を整えたカルタゴ軍が待ち構えていた。冬の川で体力を奪われていたローマ軍は大敗を喫し、全滅は免れたものの大きく後退を強いられた。

## 熾烈な伏兵攻撃

トレビア河畔での敗北の報せにローマは慌てた。ローマは海からカルタゴ軍が襲ってきて挟み撃ちになるのを恐れ、南部の守備隊を強化し、更にヒエロン2世に協力を求めた。ヒエロン2世はこれに応じてローマに援軍を送った。

北イタリアの大半にはカルタゴ軍の勢威が及び、ガリア人たちはローマに大勝したハンニバルに味方していった。ハンニバルはローマ人捕虜を鎖に繋ぐ一方でローマの同盟市からの捕虜は身代金なしで解放し、自分はローマの支配からイタリアを解放するために戦っているのだと訴えた。

翌前217年春には、カルタゴ軍は殆ど抵抗もなくアペニン山脈を南下した。ハンニバルは雪解けと春の雨で水浸しになった氾濫原を突っ切って進んだ。この過酷な行軍では多くの死者が出、ハンニバル自身は患っていた眼病が悪化して片方の眼球を失った。

この年、ローマではガイウス・フラミニウスが平民の支持で執政官に就任した。彼は以前、ケルト人から奪った土地を平民に分配しようとした人物であった。フラミニウスは進撃を続けるハンニバルを食い止めるための任務をロングスから受け継いだ。

しかしフラミニウスは平民重視の施策を行い元老院と激しく対立していた。元老院はこれまでに、フラミニウスが手柄を上げないように戦場から呼び戻そうとしたり、彼が独裁官から副官に任命された際には縁起の悪い鼠が鳴いたという理由で独裁官擁立そのものを取り消したりしていた。ゆえにフラミニウスは、元老院が邪魔をしてくる可能性を考えて

正式な就任の日を待たずに遠征に出発せざるを得なかった。

フラミニウスはエトルリアに入り、アッレティウムに布陣した。これに対しハンニバルは敢えてフラミニウスの陣を避け、ローマの領土を次々に荒らした。フラミニウスは略奪を止めようとカルタゴ軍を追撃し、ハンニバルは逃げるように進んだ。しかしトラシメヌス河畔の隘路に来ると、ハンニバルは速度を落とした。ハンニバルは夜の間に道の茂みの中に兵を潜ませた。

朝になって、ローマ軍は朝靄のかかるトラシメヌス河畔に差し掛かった。隘路によりローマ軍は長い縦列をとっていた。そこに突如ハンニバル軍が現れて道を塞ぎ、横からはケルト兵、背後からは騎兵隊が襲い掛かった。ローマ軍は戦闘に入る暇もなく殲滅され、フラミニウスも戦死した。湖に押し出されて溺死する者もいた。結果フラミニウス軍は消滅し、一方のカルタゴ軍は軽微な被害を受けたのみであった。

敗戦の知らせが届くとローマは大混乱となった。間もなく法務官が演壇に登り、市民に「我々は大規模な戦闘で敗北した」と告げ、民衆は愕然とした。

## 「のろま」作戦

トラシメヌス河畔での敗戦の知らせが届いたときも、元老院はまだ平静を保っていた。しかしもう1人の執政官グナエウス・セルウィリウス・ゲミヌスの軍がハンニバルの部下マハルバルにより壊滅させられたとの報が届くと、元老院も絶望せずにはいられなかった。今やエトルリアは奪取され、いつカルタゴ軍がローマに進軍してくるかというような状態になったのである。この非常事態に、政務官選挙は取り止めとなり独裁官の選出が決まった。しかし執政官セルウィリウスがローマに不在で連絡も困難であったため<sup>12</sup>、国民が独裁官を任命するという前代未聞の事態となった。

独裁官に指名されたのは、かつて宣戦布告に最後まで反対したクイントゥス・ファビウス・マクシムス・ウェルコススだった。彼はハンニバルと正面からぶつかるのは無謀だと悟り、直接戦うことを避けながら付きまとして補給を妨害する作戦に出た。この作戦はローマ人たちには評判が悪く、ファビウスは「のろま」を意味する「コンクタトル」という渾名をつけられた。

ハンニバルはファビウスの狙いを見抜いていた。ハンニバルは軍にあちこちの土地を荒らし回らせ、ファビウスの領地だけには足を踏み入れず略奪を防ぐための見張りまで置いた。あたかもファビウスがカルタゴ軍と通じているかのように見せかけて彼を失脚させ、作戦を中断させようとしたのである。当然ローマ民衆はファビウスへの怒りを募らせた。これを知ったファビウスは領地を国家に寄進し、疑惑を打ち消した。

ファビウスの作戦は少しずつハンニバル軍の力を削いでいった。ハンニバル軍は物資こそ略奪で獲得できたが、兵力の補充が思うように出来なくなった。ハンニバルはファビウ

---

<sup>12</sup> 独裁官を任命できるのは執政官のみとされていた。

スが決戦に持ち込まざるを得ないよう、カンパニアの肥沃な土地を略奪した。しかしファビウスは誘いに乗らず、カルタゴ軍が冬営地に戻るための隘路を塞いだ。これに気付いたハンニバルは、夜になると角に松明を括り付けた牛を暴走させた。隘路を塞いでいた部隊は自分たちが包囲されたと思い込んで持ち場を捨て、またファビウスはこれを畏と考えて警戒のため部隊に野営地に留まるように命じ、ハンニバルはその隙に隘路を突破した。

その後ファビウスは祭儀のためローマに戻るようになった。彼は騎兵長官ミヌキウスに忠告を与えて軍を任せた。しかしミヌキウスはファビウスの作戦にしびれを切らしていた。ファビウスがローマへ発った後、ミヌキウスはハンニバル軍に戦いを挑み勝利を収めた。このことがローマに伝わると、人々は熱狂したがファビウスはこれを喜ばなかった。そのため人々の心にはファビウスに対して敵意を抱き、遂にはファビウスとミヌキウスの指揮権を同等にする提案が出された。ファビウスが再び軍隊に向かった翌日、法務官ガイウス・テレンティウス・ウァロが後援となり指揮権分割の提案は採択された。

ファビウスとミヌキウスは軍団を2つに分割して指揮することになった。これを知ったハンニバルは、血気盛んなミヌキウスに陽動を仕掛けた。ミヌキウスは直ちにカルタゴ軍に戦いを仕掛けたが、ハンニバルの巧みな伏兵作戦により惨敗を喫した。ファビウスはタイミングを見計らって出撃し、カルタゴ軍を打ち破ってミヌキウスを救った。戦いの後2人は和解し、この出来事を知ったローマの人々はファビウスを讃えた。

## カンナエの悪夢

前216年、ローマは執政官ルキウス・アエミリウス・パウルスとウァロ、前執政官セルウィリウス、前補充執政官マルクス・アティリウス・レグルスの4人の下に8軍団を動員してハンニバルに対抗しようとした。ハンニバルのイタリア侵攻から既に3年目に入り、ローマは今年こそはハンニバル軍を壊滅させようと考えていた。

ハンニバルも決戦を望んでいた。しかし騎兵でこそカルタゴ軍が優っていたものの、兵力でも兵站面でも士気でもローマ軍が優勢であった。そこでハンニバルは、騎兵を展開できる平野に位置するアプリア地方の要所カンナエを占拠した。カルタゴ軍と対峙していたセルウィリウス麾下のローマ軍は動揺し、ローマに使いを送った。この報せにローマはパウルスとウァロを派遣した。

カンナエに向かった2人だったが、その意見は正反対のものであった。そもそもウァロは民衆の支持で執政官となった人物で決戦を望んでおり、一方のパウルスは貴族たちがウァロに対抗するために無理やり就任させた人物で決戦に慎重であった。この状況を見たファビウスは出発前のパウルスに、ウァロの暴走を抑え性急な行動を慎むようにと忠告を与えた。

ファビウスの忠告もあってパウルスは平原での戦いを避けるよう主張したが、ウァロはこれを聞かずにカルタゴ軍を攻撃した。この攻撃はローマ軍優位に終わったが、これによ

りローマ軍も撤退できなくなり、翌日指揮を執った<sup>13</sup>パウルスもそのまま布陣するしかなかった。

パウルスの指揮下で、遂に決戦が始まった。ハンニバルは歩兵隊を凸型に配置し、外側に重装歩兵と騎兵隊を配備した。ローマ軍はこれを圧倒するかのようにして突撃体勢に入った。ハンニバルは歩兵隊を徐々に後退させた。その結果カルタゴ軍の陣形は凹型になり、更に騎兵隊がローマ軍の背後に回り込んだことで、ローマの歩兵隊は一塊となってカルタゴ軍に取り囲まれた。ほぼ1日にわたって攻撃が続き、ローマ軍は壊滅して古代史上類を見ない数の戦死者を出した。この戦いでセルウィリウスとパウルスも戦死した。ウァッロは辛うじて逃げ延びてローマに帰還した。ファビウスもローマ市民も彼を非難せず、彼が生きて戻ったことに感謝したという。

数日後北イタリアのリタナの森でも戦闘が起こり、法務官ポストゥミウス率いるローマ軍がボイ族の罠にかかり攻囲を受けて全滅した。相次ぐ悲報にローマの町は絶望に包まれ、商店も皆扉を閉ざしてしまい元老院が按察官<sup>14</sup>を派遣して店を開けて回らせる必要がある有様であった。

ハンニバルは戦いの後ローマ人捕虜を集め、自分がローマに仕掛けているのは殲滅戦ではなく名誉と支配を競う戦いなのだと語り、身代金の条件を示して捕虜の代表をローマに向かわせた。ハンニバルはカルタゴ貴族カルタロを同行させ、ローマが和平に傾いているなら条件を提示するよう指示した。ローマの人々は動揺し意見は割れたが、結局ローマはカルタロを追い帰り身代金支払いも拒否した。

## イベリアの攻防

一方プブリウス・コルネリウス・スキピオは、傷が癒えると弟グナエウスが居るイベリア半島へと向かっていた。ローマ人たちはイベリア半島のカルタゴ軍がハンニバルに合流することを恐れていた。実際、カルタゴ政府はハンニバルの弟ハスドゥルバル・バルカに兄の軍に合流するよう命じていた。これが実現すれば、ローマにとって致命的な打撃になることは間違いなかった。

前215年、スキピオ兄弟はイベルス川付近でハスドゥルバルに圧勝し、野営地を略奪してイタリア行きを防いだ。これで当面はハンニバルの下に援軍が駆けつける心配はなくなった。更に前213年、ヌミディアで最強だったマサエシュリー王シファチェがローマと手を結んだことで、ハスドゥルバルはアフリカに戻らざるを得なくなった。

スキピオ兄弟はイベリア半島の制圧に乗り出し、遂にはサグントゥムを奪回した。しかし本国が窮地に陥っていたため十分な補給物資が届かず、思い通りにはいかなかった。そ

---

<sup>13</sup> 執政官2人が軍を率いるとき、指揮権は1日交代で執ることになっていた。

<sup>14</sup> エディリス。公安警察的役割に始まり、公共施設の維持管理、祝祭・競技会の開催など幅広い分野を担当した公職。

れでもスキピオ兄弟は勝利を上げ続けた。彼らは現地住民の支持を得るよう心掛け、その協力を得てカルタゴ軍に対抗した。

一方カルタゴは、ヌミディアのマッシュリー王ガイアの子マシニッサの協力でシファチエを破り和平を結ばせたが、スキピオ兄弟に阻まれてイベリア経由でハンニバルに補給物資を送ることができなくなっていた。そこで前 211 年、カルタゴはハスドゥルバル・バルカとマゴ・バルカ、ギスコの子ハスドゥルバルを司令官とする 3 軍と、マシニッサ率いる騎兵隊を送り込み反撃に出た。

これに対しプブリウス・スキピオは獐猛な戦士として知られたケルト＝イベリア兵 2 万を招集した。ところがケルト＝イベリア兵たちはカルタゴから賄賂を貰って撤退してしまった。プブリウス・スキピオは残りの兵たちと共に弟の軍に合流しようとしたが、カルタゴ軍が立ちはだかった。プブリウス・スキピオは夜間に行軍してやり過ごそうとしたが失敗し、マシニッサ率いるヌミディア騎兵隊に敗れて戦死した。グナエウス・スキピオもまた包囲され、間もなく敗死した。

こうしてローマはわずか 1 カ月の間にスキピオ兄弟を失い、生き延びたローマ兵士たちは騎士ティトゥス・ガイウス・マルキウスを司令官とした。マルキウスはイベルス川以北を何とか平定したが、イベルス川以南ではカルタゴ軍に完敗した。一方のカルタゴも、将軍たちの間の不和が原因となってスペイン確保には至らなかった。

## 「盾」と「剣」

ローマでは、カンナエの戦いでの敗北という非常事態を受けて、ユニウス・ペラが独裁官に任命された。ローマはカンナエの近くにいた法務官マルクス・クラウディウス・マルケッルスに可能な限りの秩序の回復を命じた。

一方のハンニバルも、兵站の不足のためにローマへの進軍を控えていた。ハンニバルは南イタリアを押さえつつ、カンナエの勝利を見たローマの同盟都市が離反することに期待していた。実際カプアや、シュラクサイ王ヒエロニューモス<sup>15</sup>はカルタゴ側についた。またハンニバルはマケドニア王国との同盟も結び、結果ローマは第 2 次ポエニ戦争と第 1 次マケドニア戦争の 2 つを同時に戦うことになった。しかし兵站力に欠けるハンニバル軍に味方するイタリア都市はそれほど多くはなかった。

国難の中でローマの民衆は祖国愛を強め、反撃戦の機運も高まっていた。しかし元老院もさすがに慎重になっており、ファビウスの戦法が見直された。前 215 年、ファビウスは執政官に任命された。

翌前 214 年、マルケッルスと前年に続いてファビウスが執政官に就任した。2 人はカンパニアにおける戦略上の要地カシリーナを攻撃しこれを奪回した。この時守備隊はファビウスに降伏したが、マルケッルスは容赦なく敵を虐殺した。同じ年、マルケッルスはシュ

---

<sup>15</sup> ヒエロン 2 世はこの頃に死去し、15 歳の孫ヒエロニューモスが王になっていた。

ラクサイからレオンティーニを奪取した。シュラクサイでは王ヒエロニューモスが暗殺され、寡頭派が政権を握ってローマと講和を結ぼうとした。しかしその後、ハンニバルが送り込んでいた使節が政権を奪取したことでこれは阻まれた。

翌前 213 年には、マルケッルスは前執政官<sup>16</sup>として不穏な情勢の続くシチリアに派遣された。ここでも彼は厳しい措置に出た。暴動が起きていたレオンティーニで、約 200 人のローマ軍脱走兵を見つけて殺害したのである。結局この措置は大規模な反乱を誘発することになった。

次いでマルケッルスは、ハンニバルの傀儡と化したシュラクサイを陸と海の両方から包囲した。マルケッルスは「サンボカ」<sup>17</sup>と呼ばれる複雑な攻城兵器を用いた攻撃に出た。しかし数学者アルキメデス考案の兵器群の前に、ローマ軍は粉碎された。ローマ軍は封鎖作戦をとる以外の方法がなくなり、マルケッルスも意気消沈した。シュラクサイの善戦に助けられてシチリア戦線はカルタゴ優位に進み、シュラクサイを囲むローマ軍をカルタゴ軍が外から攻撃する展開にもなりかけた。

しかし前 212 年、シチリアのカルタゴ軍の間で疫病が広がり司令官ヒミルコも死亡した。同年の夏、シュラクサイは内通者からの報告を受けたマルケッルスにより、祝日で警戒が緩んでいたところを急襲されて陥落した。町中が略奪され、混乱の中でアルキメデスはローマ兵に殺害された。これを知ったマルケッルスはアルキメデスの死をひどく惜しんだという。

前 211 年には、ファビウスがカプアを包囲した。カプアはカンパニアの要地でありここを奪われるのはハンニバル軍にとって致命的だった。前年に占領したタレントウムにいたハンニバルは、カプアからローマ軍を引きなすため、ローマに向かう街道を進軍し、ローマの近くに陣を張って陽動をかけた。しかしファビウスはこれを見抜き、わずかな兵団のみを派遣して包囲を続け、遂にカプアを陥落させた。これによりローマはイアリアでの優位を回復した。

前 210 年、マルケッルスが執政官に再任された。シチリア住民が反発したため、マルケッルスはイタリア半島内で戦うことになった。この後マルケッルスとハンニバルは 3 度にわたって激突したが、両者ともに決定的な勝利を挙げることはできなかった。

翌前 209 年には、ファビウスが 5 度目の執政官就任を果たし、タレントウムの攻撃を行った。ハンニバルは救援に駆けつけたが、そのときには町は既に陥落していた。タレントウムは略奪され、ハンニバルはやむなく退いた。

一方マルケッルスの軍は戦いで疲弊し、最早ハンニバル軍と戦えなくなっていた。マルケッルスはローマに呼び戻されたが、前 208 年には再び執政官となって戦場に戻った。しかしヴェヌシア（現ヴェノーザ）近郊を偵察中にヌミディア騎兵隊の吸収を受けて殺害されてしまった。ハンニバルは敬意をこめてマルケッルスの遺体を火葬し、遺骨をローマに

---

<sup>16</sup> プロコンスル。任期を終えた執政官が就任して属州統治にあたった。

<sup>17</sup> 同盟の楽器に似ていたことからこう呼ばれる。



届けた。

長引く戦いでハンニバル軍は勢力を失っていき、イタリア半島南部を占領し続けるのみという状態になっていた。ローマの民衆はカルタゴ軍を翻弄したファビウスとマルケッルスケッルスの功績を称え、ファビウスを「ローマの盾」、マルケッルスケッルスを「ローマの剣」と呼ぶようになった。

## イベリア反撃戦

戦いが好転の兆しを見せるようになると、ローマ元老院は新たに2個軍団を編成し、イベリア半島での勢力回復に乗り出した。最初元老院はガイウス・クラウディウス・ネロに指揮権を与えた。前210年にネロはハストゥルバル・バルカを打ち破ったが、決定的な成果を上げることはできなかった。そこでネロはローマに戻るようになった。しかし劣勢のイベリア戦線を進んで指揮しようとする者は少なかった。

そこで白羽の矢が立ったのが前211年に戦死したプブリウス・スキピオの同名の息子だった。このときスキピオはまだ26歳で、しかも按察官しか経験したことがなかった。そのような人物に執政官代理の指揮権が与えられるというのは常識では考えられない措置であった。しかしスキピオには父と伯父の敵討ちという大義があり、しかもスキピオの名はイベリア半島で好意的に受け止められる可能性が高かった。ゆえに元老院は慣習を無視してスキピオに望みを託したのである。

前210年、スキピオはイベリアに到着した。彼は徹底的に情報を集めた。そしてカルタゴの3指揮官は皆カルタゴ・ノウァから遠く離れており、今カルタゴ・ノウァを急襲すれば駆けつけても間に合わないことを掴んだ。ハストゥルバル・バルカが再びピレネー山脈を越えようとしているという情報も入っていたが、スキピオはカルタゴ・ノウァ攻略を優先することにした。更にスキピオは漁師たちから引き潮の時には都市の岸部に潟が広がることを聞き出した。そこでスキピオは兵士たちに、ネプトゥヌス神が夢に現れて守護を約束したと告げた。彼は予てから頻繁に祈りを捧げ託宣を受けていたため兵士たちの戦意は高揚した。

潮が引いて潟が現れると、スキピオ軍はそこを歩いて渡りカルタゴ・ノウァを占領した。この勝利でスキピオは神の加護を受けているという伝説すら生まれ、兵士たちからの信頼と忠誠は絶大なものとなった。カルタゴ・ノウァはイベリアにおけるバルカ家の本拠地であり、ここを占領したことでローマ軍は大きく優位に立った。

スキピオは現地民との良好な関係構築にも心を砕いた。ある戦いで部族長の娘が捕虜となった。スキピオは彼女を婚約者の下に送り返し、更には彼女の両親が差し出した身代金を祝儀として届けた。娘が属していた部族はこの行動に感激し、ローマ軍への忠誠を誓った。そしてカルタゴ・ノウァ陥落の後、イベリアの有力な領主たちはローマに味方するようになっていった。

スキピオは快進撃を続け、前 208 年にはバエクラでハスドゥルバル・バルカに圧勝した。しかしハスドゥルバルのピレネー越えを阻止することには失敗し、ハスドゥルバルはそのままイタリアへと向かって行った。このときローマ軍の捕虜になった兵士たちの中に、マッシュリー王子マシニッサの甥がいた。スキピオはマシニッサを懐柔する好機と見て、この少年に贈り物をして敵陣へと丁重に送り返した。

翌前 207 年、ハスドゥルバル・バルカはアルプスを越えて北イタリアに入った。しかしその頃にはローマも反撃するだけの力を回復しており、執政官マルクス・リウィウスがこれを邀撃した。ネロも半島南部にハンニバルに対抗するための軍勢を残し、ハンニバルに悟られないように細工をして北上した。そんな中でローマ軍はハスドゥルバルが兄に宛てた連絡文を偶々入手した。リウィウスとネロはそれに基づきカルタゴ軍を急襲して壊滅させ、メタウルス河畔でハスドゥルバルを戦死させた。

ハスドゥルバルを破ったネロは直ぐに南部に引き返した。このときハスドゥルバルの首がハンニバルの野営地に投げ込まれ、彼はこの時初めて事の重大さを知るようになった。

イベリアでは、前 207 年スキピオがギスコの子ハスドゥルバルの軍に猛攻を仕掛けた。しかし冬を前にして、彼は敢えて冬営のできる拠点まで全軍を引き下がらせた。そして翌前 206 年、彼はイリパの戦いでマゴとギスコの子ハスドゥルバルを破り、イベリアのカルタゴ軍を崩壊させた。マゴとハスドゥルバルはガデスに逃れ、ハスドゥルバルはそこからアフリカへと渡った。マゴはカルタゴ政府の命を受け、ガデスの全ての財産を資金にして艦隊でイタリアを攻撃しようとしたが失敗した。ガデスに戻ったマゴ軍を人々は拒み、怒ったマゴは高官たちを磔にした後イベリアを去った。こうしてカルタゴ軍はイベリアから撤退し、カルタゴのイベリア支配は終わりを告げた。

## ヌミディア情勢

イベリアからカルタゴ軍を駆逐したスキピオは、ヌミディアの王たちとの交渉に取り掛かった。彼はマサエシュリー王シファチェ説得のためアフリカに渡った。ところが同じときにギスコの子ハスドゥルバルもこの王の下を訪れ、両者が同じ饗宴の席に連なるという事態になった。シファチェはこの機に両国を講和させようとしたが当然失敗し、スキピオはシファチェと友好条約を結んでイベリアに戻った。

同じ年、スキピオはマシニッサとも会談した。マシニッサはスキピオの同盟者となり、スキピオが司令官としてアフリカに上陸するならマッシュリー王国は全面協力すると約束した。

ところがこの頃、カルタゴ政府はギスコの子ハスドゥルバルの娘でマシニッサの婚約者だったはずのソフォニバをシファチェに嫁がせ、これによりマサエシュリー王国はカルタゴ側に就いた。一方同じ頃マッシュリー王国では王ガイアが死去して王位継承の混乱が起こった。その中で即位したのはラクマゼスという少年で、彼はマザエトゥルスの傀儡であ

った。このマザエトゥルスという人物はハンニバルの姪を妻としており、しかもシファチェと賓客関係にあった。こうしてマッシュリー王国はカルタゴ派に乗っ取られてしまい、ローマ派の王子マシニッサはシファチェやカルタゴの軍に対してゲリラ的戦闘を続けながらスキピオ軍を待つことになった。これにより、スキピオはマサエシュリー・マッシュリー一両王国からの援助を期待できなくなった。

## アフリカ遠征

前 205 年、ローマはマケドニア王フィリッポス 5 世とフォイニケの和を結び、第 1 次マケドニア戦争が終結した。これによりローマは西と東両方の脅威を取り除くことに成功したのである。一方でイタリア半島内の戦いは膠着状態となった。戦況はローマの優勢であったが、国家も市民も消耗しきっており、一気に戦争にけりをつけようとはしなかったのである。

同年、スキピオはローマに凱旋し民衆から英雄として迎え入れられた。スキピオはアフリカ遠征の公約を掲げ、民衆の支持を得て執政官に就任した。しかしファビウスが第 1 次ポエニ戦争におけるレグルスの例を挙げてこれに反対し、元老院の大半も消極論に傾いた。しかし民衆の支持を考えると、元老院も遠征そのものに反対することはできなかった。結局元老院はスキピオに、アフリカ遠征は許可するがそのための追加の軍団は提供しないから遠征したければ自分で志願兵を集めるように、と告げた。ファビウスはこの 2 年後にローマの勝利を見ることなく死去し、ローマの市民たちは彼の葬儀のために進んで寄付をした。

スキピオはその名声のおかげでほどなく多数の兵士を徴収することに成功した。スキピオはシチリアで 1 年間新兵訓練を行った。このとき彼はギリシア風の衣装を纏って陣頭指揮に当たったという。この「ギリシアかぶれ」な行動は一部のローマ人たちの反発を招いた。

前 204 年、兵士たちの訓練を終えたスキピオは遂にアフリカへと向かった。スキピオはハンニバルと戦うことを避けたいと思っており、アフリカ遠征はそのための戦略でもあった。アフリカに上陸すると、スキピオはまずウティカを包囲した。このときシファチェがカルタゴ軍と共に駆けつけた。シファチェは表面上ローマと友好関係にあったため、ローマに和解を勧めたがスキピオは拒否した。ローマ軍とカルタゴ軍は平原に場所を移して衝突し、結果はローマ軍の勝利に終わった。この敗北でギスコの子ハスドゥルバルは失脚し、ハンニバルの甥のハンノが将軍となった。

スキピオは更に進撃を続け、トゥネスの攻略にも成功した。一方ヌミディアではマシニッサがシファチェを破って捕虜とした。この時彼はソフォニバと結婚したがローマはこれを容認せずソフォニバは自殺した。

トゥネス攻略後、スキピオはカルタゴに講和条件を突きつけた。条件は非常に厳しかった。

たが、シファチェが捕虜になったことを知ったカルタゴは交渉に応じた。同時にカルタゴ政府はハンニバルとマゴに帰還命令を出した。前 203 年の秋、ハンニバルは侵攻から 16 年目にして遂にイタリアを離れた。一方のマゴはカルタゴに着く前に戦闘の傷のために死亡した。

ハンニバルの帰還はカルタゴの主戦派を再び勢いづかせた。停戦中の前 203 年末頃、ローマの補給船がカルタゴの近くで嵐に遭って貨物が付近に荷揚げされるということがあった。カルタゴ市民は元老院に戦利品を見逃すなど抗議し、民衆の勢いに負けた政府はこの物資を強奪した。間もなく停戦は破棄され、戦いが再開された。

両軍はザマで対峙した。歩兵力ではハンニバル軍が、騎兵力ではスキピオ軍が優っていた。またハンニバルは前衛に 80 頭の象部隊を配置していた。これに対処するためスキピオは歩兵の間隔を通常より広くとって象を回避できるようにした。結局、象への懸念は大した問題にならなかった。トランペットの音と投矢に象は驚き、ローマ軍を蹴散らすどころかカルタゴ騎兵隊に突進したのである。一方歩兵隊の戦いは熾烈を極めたが、間もなくカルタゴ騎兵隊をローマ騎兵隊が圧倒し、更にマシニッサの騎兵隊がカルタゴ歩兵隊の背後に回った。カルタゴ歩兵隊は包囲され、勝敗は決した。カンナエの戦いでとられた作戦が、今度は逆の立場で行われたのであった。この戦いでローマの勝利は決定的なものとなった。

ザマの戦いの後もハンニバルは生き延び、スキピオが提示した新たな講和条件を受け入れるようカルタゴ政府を説得した。前 201 年和平が結ばれ、第 2 次ポエニ戦争は終結した。スキピオはローマに凱旋し、平民からの賞賛と貴族からの羨望に迎えられた。アフリカ遠征を成功させて第 2 次ポエニ戦争を終わらせたスキピオは、以降「アフリカヌス」の渾名で呼ばれるようになった。

## 英雄たちの末路

講和の条件は非常に過酷なものであった。多額の賠償金が課せられ、多数の人質、軍船の殆ど、そして全ての軍象をローマに引き渡すよう要求された。更にローマの同意なしでの交戦は禁止され、領土も開戦時に本国で保持していた地域のみとなってカルタゴは海上覇権を完全に喪失した。

ハンニバルは敗将となったが、それでも民衆からの期待は依然として大きかった。民衆の支持は貴族たちの反感をも押しのけ、前 196 年ハンニバルはスーフエース<sup>18</sup>に就任し国政を委ねられた。

ハンニバルは大改革に乗り出した。彼は民会中心の国政樹立・不正の是正・財政再建を掲げた。民会の支持を得て、財政再建は実を結ぶことになった。しかし改革案はあまりに急進的で、貴族層は猛反発した。一方で民衆からの支持は絶大で、貴族たちは彼に改革を

---

<sup>18</sup> カルタゴの最高政務官。任期 1 年。

止めさせることができなかった。そこで貴族たちはローマの元老院に頼った。彼らはハンニバルがローマに対し謀反を企てていると密告した。前 195 年、ローマから使節が派遣された。ハンニバルはローマの干渉で国家が分裂することを恐れ、カルタゴを脱出してシリアのアンティオコス 3 世の下に亡命した。

一方のローマは、第 2 次ポエニ戦争が終結した後、今度はヘレニズム世界に攻撃を仕掛けた。まず前 200 年にフィリッポス 5 世に対して第 2 次マケドニア戦争を仕掛け、前 197 年キュノスケファライでこれを破った。次いでローマはシリアのアンティオコス 3 世との戦いを始め、スキピオ・アフリカヌスも弟ルキウスの副官としてこれに参加した。前 190 年ローマ軍はマグネシアの会戦でシリア軍を破り、アンティオコス 3 世との間に和平が結ばれた。これによりハンニバルは再び逃亡を余儀なくされ、諸国を転々とした後ビテュニア王国<sup>19</sup>へと逃れた。

この頃ローマでは、嫉妬の感情と個人崇拜への懸念から反スキピオ勢力が力を伸ばしてきていた。その急先鋒となったのが戦後のイベリア遠征で大きな功績を上げていたマルクス・ポルキウス・カトーであった。カトーはその職務において清廉潔白な人物であったが、同時に個人的な恨みの感情から行動する人物でもあった。彼は旧套墨守の国粋主義者であり、「ギリシアかぶれ」のスキピオ・アフリカヌスを嫌っていた。

小アジアから帰還したスキピオ・アフリカヌスは、使途不明金があったとして弟と共に告発された。ティベリウス・センプロニウス・グラックスの弁護もあって有罪は免れたものの、スキピオ・アフリカヌスはカンパニアへの逃亡を余儀なくされ、翌前 183 年、失意の内に死去した。享年 52。彼はスキピオ家の墓に葬られることさえ拒否したという。

同じ年、ローマの使節がビテュニア王プルシアスの下を訪れてハンニバルの引き渡しを求めた。ハンニバルはローマ人の手に渡ることを嫌い、毒を飲んで自殺した。享年 64。

こうして、第 2 次ポエニ戦争のローマとカルタゴの 2 人の英雄は奇しくも同じ年に、同じように祖国に裏切られた失意の中で死去したのであった。

## 「それにしてもカルタゴは滅ぼされるべきである」

カトーは前 184 年に監察官<sup>20</sup>に就任した。彼は大規模な建設事業を行う一方で、儉約に努め政敵を容赦なく批判し続けた。贅沢品は課税され、不要と判断された彫像は撤去された。カトーはあまりに多くの政敵を作り、多くの訴訟を抱え込んだ。彼は約 45 もの訴訟に関わったが、その弁舌で以てただ 1 つを除いた全ての訴訟に勝訴した。

この頃ヌミディアでは、王となったマシニッサが統一的政権を築いていた。カルタゴにとってこれは致命的な事態だった。マシニッサはカルタゴに従属していた地域への侵攻を

---

<sup>19</sup> 小アジア北部にあった王国。

<sup>20</sup> ケンソル。あらゆる公共事業の発注、選挙人名簿の作成、元老院議員名簿の管理と多岐にわたる仕事を担当した公職で、古代ローマのエリートコースの終着点だった。

行い、領有権を主張するという行動を繰り返した。この土地紛争は第2次ポエニ戦争終結後から前150年代まで続いた。カルタゴはローマに調停を求め、ローマは度々使節を派遣した。

マシニッサの脅威に晒されていた一方で、貿易・商工業・貢納がもたらす富でカルタゴは急速な復興を遂げ、ローマに対し50年分割支払いだった賠償金も一括して支払いたいと申し出るまでになっていった。またローマやヌミディアの侵攻に脅かされた人々がカルタゴ市内に移ってきたため、カルタゴ市の人口は膨れ上がった。

そんな中で、カトーは前150年代<sup>21</sup>にカルタゴ政府とマシニッサの仲介のための使節団の一員としてカルタゴに渡った。そこで彼はカルタゴ市の大きさと豊かさに驚愕し、ローマの脅威となる前に滅ぼす必要があると確信した。

カトーは帰国すると元老院に出向いた。そしてカルタゴから持ち帰った新鮮なイチジクを掲げ、このような見事な果実を産する国が船でわずか3日の場所にあるのだ、とカルタゴの脅威を訴えた。そして演説を「それにしてもカルタゴは滅ぼされるべきである」という言葉で締めくくった。これ以降カトーはどんな内容の演説であれこの言葉で締めくくったという。一方スキピオ・ナシカ・コルクルムスらはカルタゴという脅威の存在こそがローマの規律を保っているのだとしてカトーに反対し、彼はどんな演説も「カルタゴに手を出してはならない」という言葉で締めくくった。

## ローマの策謀

前150年、マシニッサに悩まされ続けて業を煮やしたカルタゴは、親カルタゴ派40人を追放した。追放された人々はマシニッサの下に逃れ、マシニッサは息子グルッサとミキプサを派遣して亡命者らの帰還を求めた。カルタゴはこれを拒否し、更に民主派が帰還しようとする使節を急襲した。マシニッサはこれを理由としてカルタゴを攻撃し、カルタゴも遂にヌミディアに戦争を仕掛けた。これにより第2次ポエニ戦争の講和条約のローマの許可なき戦争禁止の条項は完全に無視された形となった。戦いはヌミディア軍の圧勝に終わったが、マシニッサは間もなく老衰により90歳で死去した。

ローマは同盟国への侵攻を口実に一気に強硬な姿勢をとり、戦争準備に入った。カルタゴ政府はこれに慌て、マシニッサとの戦いを主唱した人々や戦いの指揮官ハストゥルバルに死刑を宣告し、ローマに使節を送って弁明を行った。しかしローマの元老院は、カルタゴはこれらの行動を戦う前に行うべきだったとして取り合わなかった。

そんな中で、カルタゴの不利を悟ったウティカが離反した。ローマ元老院はこれを受けて対カルタゴ戦争を決議、執政官マニウス・マニリウスとルキウス・マルキウス・ケンソリヌスに大軍を率いさせてシチリアに派遣した。

宣戦布告を知ったカルタゴは再び使節を派遣した。今度はローマ側も、カルタゴの自治

---

<sup>21</sup> 前157年から前153年のどちらか。

とアフリカ領保持の保障のための条件として、貴族の子供 300 人を人質としてシチリアにいる執政官に差し出すこと、以降提示するローマの命令に従うことを要求した。カルタゴは条件を呑んで人質を差し出したが、マリニウスらは彼らをそのままローマに送り、戦争を終える条件はウティカに着いてから伝えるとした。

数日後ローマ軍はウティカに到着した。カルタゴはなおも使節を派遣してローマの寛容に訴えた。これに対しローマはカルタゴにあらゆる武器を引き渡せと要求した。このときカルタゴでは死刑宣告を受けたハスドゥルバルが 2 万人を集めて市の外に陣取っており、カルタゴ側が武器を手放せばクーデタが起きる危険があった。この事情を聞いたローマ側は、ハスドゥルバルにはローマ側が対処するから武器を引き渡せと繰り返し、結局武器引き渡しは実行された。

その後ケンソリヌスは最後の要求として、カルタゴに現在の町を放棄して内陸に移るよう迫った。ローマ側はこれまでの約束にカルタゴ市そのものに関する内容がなかったことを利用してカルタゴから海を完全に奪おうとしたのである。当然カルタゴはこれを拒否し、ローマはカルタゴ市破壊を決定した。カルタゴ側はローマ元老院にもう 1 度使節を送ることを嘆願したが、執政官は聞き容れなかった。

このことがカルタゴの元老院議員場で伝えられると人々の感情は爆発し、元老院議員や施設を襲撃する者も現れて市内は騒然となった。ある者は武器や船を引き渡してしまったことを嘆き、中には遥か以前にローマに引き渡してしまった象たちの名を呼び続ける者までいた。

混乱の中でカルタゴ元老院は宣戦布告を行った。ローマに対抗するため、カルタゴ政府は前奴隷を解放し、更にハスドゥルバルの死刑宣告を撤回して市外の戦闘を任せた。こうして前 149 年、第 3 次ポエニ戦争が始まった。カトーの執念が遂に身を結んだのである。この直後にカトーは死去した。

## 最後の抵抗

カルタゴ攻略に当たってローマ軍は二手に分かれ、マニリウスは陸側、ケンソリヌスは海側からカルタゴを攻撃した。ローマ軍は巨大な破城兵器を用いてカルタゴを攻撃した。しかしカルタゴ側は夜の内に城壁を修復し、攻城兵器に火をつけた。カルタゴは驚異的な反撃を見せ、火のついたボートを放ってローマ艦隊を焼き払ったり、補給拠点を襲ったローマ軍をハスドゥルバルが敗走させたりもした。

ローマにとって簡単に勝利できるはずだった第 3 次ポエニ戦争は、カルタゴの必死の抵抗で停滞した。前 148 年には執政官ルキウス・カルプルニウス・ピソがカルタゴ近くの町を包囲攻撃したが撃退された。また、マシニッサの 3 人の息子たち<sup>22</sup>はローマ軍への協力を約束していたが、グルッサ以外は厭戦的であった。グルッサの陣からも多数の離反者が

---

<sup>22</sup> マシニッサの死後、この 3 人は共同統治を行っていた。

現れ、これに力を得たカルタゴはマシニッサの残る2人の息子たちやマケドニアのアンドリスコス（偽フィリップス）に援助を要請した。

カルタゴを攻撃していたローマ軍の司令官の中に、スキピオ・アフリカヌスの養子プブリウス・コルネリウス・スキピオ・アエミリアヌスがいた。彼は義父の盟友マシニッサを助けるためにアフリカにいて、マシニッサ亡き後の王位継承問題を調停した人物であった。スキピオは執政官たちの失敗を補う果敢な戦いぶりを見せた。

前147年、スキピオはローマに戻った。表向きは按察官立候補のためだったが、実際は執政官就任のため世論に働きかけるのが目的だった。結局元老院も彼の人気に負けてスキピオの執政官就任を特例として認め、アフリカ戦線の指揮権を与えた。

アフリカに戻ったスキピオは、まず地峡部の封鎖を強化した。これによりカルタゴはわずかな補給しか得られなくなり、市内は飢餓状態となっていた。市内の防衛線を指揮するようになっていたハスドゥルバルはローマの攻撃に対する腹いせに捕虜を拷問して殺戮したが、ローマ軍の怒りを掻き立てるばかりであった。更に彼は海上からもたらされるわずかな食糧を自分の兵士に分配してしまい、市民の飢餓は一層ひどいものとなった。

次いでスキピオは海上封鎖に取り掛り、海上に長い突堤を築き始めた。これを見たカルタゴ側は、海に出る水路をローマに気づかれないようにしながら突貫工事で切り開き、更に古い船材を用いて三段櫂船と五段櫂船を計50隻造り上げた。

カルタゴは直ぐにこの艦隊を出撃させた。このときローマの艦隊は包囲戦に慣れきって無防備な状態で停泊しており、これを奇襲すれば全船を拿捕できた可能性もあった。しかしカルタゴ艦隊はその威容を見せつけるのみでその日は帰投した。そして3日後にカルタゴ側が海戦を仕掛けた時にはローマ側も準備ができており、互角程度の戦いにしかなかった。

戦いの後、カルタゴ側は更なる大きな失敗を犯した。狭い水路に艦隊が殺到したため、遅れて帰投した大型の軍艦は城壁の外の幅の広い埠頭に停泊した。これはスキピオに絶好の攻撃ポイントを教えることになってしまい、間もなくこの埠頭はスキピオの手に落ちて海の側もいつ突破されるか分からなくなった。

## カルタゴ滅亡

前147年末、決定的な出来事が起こった。まだ細々と続いていた補給の拠点であった街ネフェリスが陥落したのである。グルッサの攻撃を受けて、カルタゴの食糧輸送を担当していた部隊は消滅した。これによりカルタゴへの食糧補給は途絶え、更にアフリカ領の人々も戦意を喪失して皆ローマ軍に降伏・占領された。

翌前146年春、遂に決着の時が訪れた。ハスドゥルバルは攻撃を食い止めるために商港に火を放ったが、その隙にローマ軍の一部隊が軍港の壁を登った。このときスキピオの義



理の甥にあたるティベリウス・グラックス<sup>23</sup>はカルタゴの城壁に1番乗りした兵士の1人となった。守備兵たちに抵抗する力は最早残っておらず、ローマ軍は忽ち港の周囲の壁を制圧した。

翌日、ローマ軍は市内に突入した。市内の市街戦は凄惨なものとなり、町中で殺戮が行われて町は炎に包まれた。惨劇は6日にわたって続き、7日目になって聖域に逃げ込んでいた人々が助命を嘆願してきた。これに対しスキピオは、ローマ脱走兵以外の助命を約束した。このとき助命された約5万人が生き残ったカルタゴ人の全てであった。ローマ脱走兵たちは絶望し、ハスドゥルバルらと共に神殿に立て籠もって最後の抵抗を行った。しかし最後には皆持ち場を捨てて神殿の屋根に逃れた。ハスドゥルバルはローマ軍に投降し、裏切られた人々は彼を罵倒した後神殿に火をつけて焼死した。

町は10日にわたって燃え続け、カルタゴは灰燼に帰した。スキピオは兵士たちに自由に略奪する期間を与え、ローマに勝利を伝えた。シチリアにも使者を送り、過去にカルタゴに奪われた者があれば持ち帰るよう伝えた。投降した住民たちは奴隷として残りの戦利品と共に売り払われた。カルタゴは跡形もなく破壊され、ローマ人たちはその地を呪い、永遠に不毛の地とするために塩を撒いた。

こうしてかつて海洋帝国として栄えたカルタゴは、ローマとの1世紀以上にわたる戦争の末に滅亡したのである。カルタゴの滅亡で他のフェニキア諸都市も衰退し、フェニキア人の船が地中海を航行する時代は終わりを告げた。

## 勝者のその後

スキピオ・アエミリアヌスはカルタゴを滅ぼした功績により「アフリカヌス」の渾名を得た。その後スキピオは監察官となり、カトーに倣い<sup>24</sup>厳格に職務を遂行したが、彼の提案は同僚に退けられたり修正されたりして大きな効果を上げることはなかった。

前137年、ティベリウス・グラックスは再び戦争が勃発したイベリアへの遠征軍に従軍した。そこでローマ軍は罠にかかり包囲されてしまった。このときケルト人たちはかつて誠実な対応で自分たちを驚かせたセンプロニウスの息子がいると知り、その人物ならば交渉相手として認めると通告した。そしてティベリウスの働きで和平は成立し、ローマ軍は救われた。更にティベリウスは原住民たちの信頼をも勝ち取った。

ところがローマ人たちは度重なる勝利で傲慢になっていた。彼らにとってこのような講和は恥辱以外の何物でもなかった。結局、元老院は1年と経たない内に講和を破棄した。講和の破棄によって、ティベリウスはグラックス家の名誉も個人的な名誉も打ち砕かれたことになった。

---

<sup>23</sup>スキピオ・アフリカヌスの娘コルネリアとセンプロニウス・グラックスの子。

<sup>24</sup>カトーはスキピオ・アエミリアヌスにだけは一目置いており、生前には親交を結んでいた。

その後スキピオ・アエミリアヌスが被護民と友人を集めて軍団を編成し、前 133 年にイベリアの抗争に終止符を打った。彼はこのときの功績から「ヌマンティヌス」とも呼ばれるようになった。

ティベリウスはまた、戦勝を重ねるうちに耕作者が奴隷ばかりとなり、ローマ軍を支える自作農民が激減した状況に危機感を覚えた。そして前 133 年に護民官に就任すると、土地改革に乗り出した。改革は現状にも配慮したものだったが、既得権益を守ろうとするための反発は強く結局ティベリウスは強硬な行動に出た。当然反発は激しく、最後にはティベリウス派たちは平民会の議場で殺戮された。最早護民官でなかったティベリウスも撲殺され、遺体はテヴェレ川に投げ捨てられた。

スキピオ・アエミリアヌスはローマの統治には王政的・貴族政的・民主政的要素のバランスが重要と考えていた。そのため彼はティベリウスの改革により自身の信念と一族の忠誠心の間で苦しみ、ただ静観する他なかった。そしてティベリウスが殺されたときも犯人たちを非難できず、彼は平民の支持を失った。前 129 年、寝床の中で死んでいるスキピオが見つかった。あまりに突然の死に他殺の噂も流れた。スキピオの訃報に政敵たちでさえその死を惜しんだ。

前 123 年、ティベリウスの弟ガイウスが護民官となり改革を始めた。しかしその改革はあまりに過激で、改革は反対の動きの中でガイウスは自殺した。このような混乱の中で、ローマは内乱の時代へと突入していくのである。

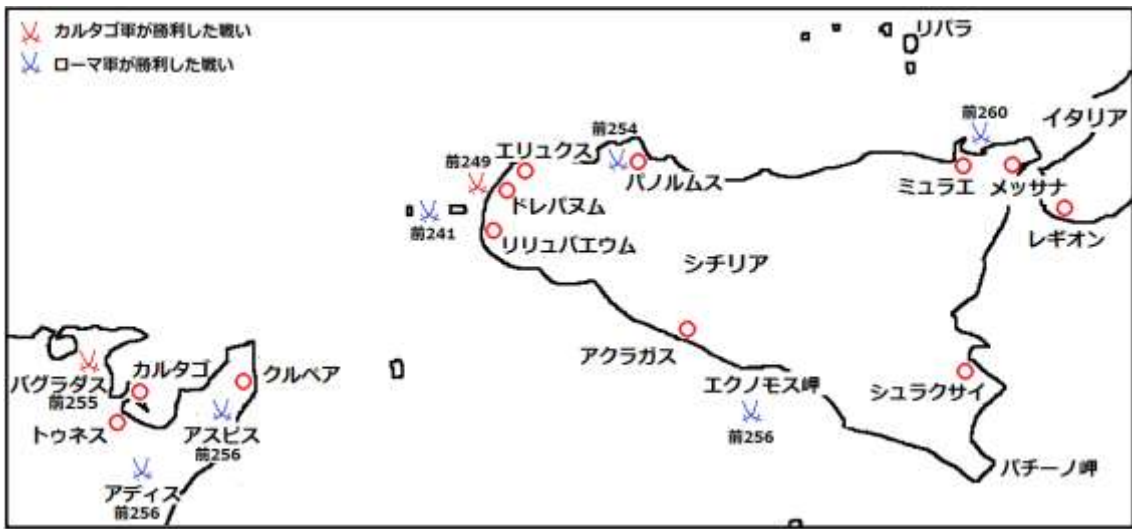


図1 第1次ポエニ戦争



図2 第2次ポエニ戦争

## 参考資料

- 栗田伸子、佐藤育子 『興亡の世界史 03 通商国家カルタゴ』 講談社 2009年
- セクストゥス・ユリウス・フロンティヌス 『フロンティヌス戦術書』 兵頭二十八訳  
株式会社 PHP 研究所 2013年
- ティトゥス・リウィウス 『ローマ建国以来の歴史 5 ハンニバル戦争(1)』 安井蒨  
訳 2014年
- テオドール・モムゼン 『ローマの歴史 II 地中海世界の覇者へ』 長谷川博隆訳 名古屋  
大学出版会 2005年
- フィリップ・マティザック 『古代ローマ歴代誌 7人の王と共和政期の指導者たち』  
東眞理子訳 創元社 2004年
- 本村凌二 『興亡の世界史 04 地中海世界とローマ帝国』 講談社 2007年